

近畿大学生における性的マイノリティの割合といじめおよび自殺念慮・未遂の経験

中京大学教養教育研究院 教授 風間 孝

はじめに

本稿では、近畿大学において性の多様性に関する施策の基礎となる性的マジョリティ学生と性的マイノリティ学生の割合について検討するとともに、両群間の学校時代におけるいじめや身体的暴力、そして自殺念慮・自殺未遂の経験割合の比較をおこなった。

性的マイノリティの割合については、様々な調査が実施されているが無作為抽出によるものとしては、2019年に大阪市で実施された調査（以下、大阪市調査）と2023年に実施された全国調査がある。

18歳～59歳を対象にした大阪市調査では、異性愛者の割合が83.2%、レズビアン・ゲイ（同性愛者：L・G）が0.7%、バイセクシュアル（両性愛者：B）が1.4%、アセクシュアル（無性愛者：A）が0.8%、トランスジェンダー（T）が0.7%であり、同性愛者かつトランスジェンダー等の重複を取り除くとLGBTの割合は3.3%であった¹。

18～69歳を対象にした全国調査においては、性的指向のアイデンティティでは異性愛者が79.0%、レズビアン・ゲイ（同性愛者）が0.4%、バイセクシュアル（両性愛者）が1.8%、アセクシュアル（無性愛者）が0.9%、決めたくない・決めていないが5.6%であった。また性自認のあり方では、シスジェンダーが98.7%、トランスジェンダーが0.6%であり、重複を除いたLGBTの割合は3.5%と算出されている²。

以上から成人以上の市民を対象にした調査ではLGBTの割合は、およそ3%程度であることがわかる。

また性的マジョリティと同性愛者・両性愛者（LGB）、トランスジェンダー（T）の自殺念慮・未遂の割合については、前述の大阪市の調査において結果が公表されている。自殺念慮の割合では、シスジェンダーの異性愛者が7.2%であるのに対し、LGBは29.0%、Tは37.5%であり、シスジェンダーの異性愛者と比べてLGBは4.0倍、Tは5.2倍高かった。自殺未遂ではシスジェンダーの異性愛者が1.5%であるのに対し、LGBは9.7%、Tは15.6%であり、シスジェンダーの異性愛者と比べてLGBは6.5倍、Tは10.4倍高かった³。これらの結果から、成人を対象にした調査ではLGBとT、すなわち性的マイノリティはシスジェンダーの異性愛者、すなわち性的マジョリティよりも自殺念慮・未遂の割合が高く、メンタルヘルスを悪化させやすい状況に置かれていることが示されている。

一方で本調査はこれらと異なり、大学生を対象として実施している。成人以上の市民を対象とした調査と比べて、近畿大学生における性的マイノリティの割合、および性的マイノリティ学生における自殺念慮・未遂の割合はどのようになっているだろうか。

¹ <https://www.ipss.go.jp/projects/j/SOGI/%E7%B5%90%E6%9E%9C%E9%80%9F%E5%A0%B120190425%E5%85%AC%E8%A1%A8%E7%94%A8.pdf>（最終確認 2024 年 1 月 5 日）

² <https://www.hosei.ac.jp/press/info/article-20231027123950/>（最終確認 2024 年 1 月 5 日）

³ <https://osaka-chosa.jp/health.html>（最終確認 2024 年 1 月 5 日）

以下では、回答者の出生時の性別、性自認、性的指向および性的指向のアイデンティティを踏まえた性的マイノリティと性的マジョリティの割合について明らかにしたあとに、不快な冗談やからかいや身体的暴力、そして自殺念慮・未遂の割合における両群間の比較をおこなう。

1 出生時の性別と性自認の関係

(1) 出生時の性別

問 23 で出生時の戸籍・出生届の性別（以下、出生時の性別）について尋ねたところ、男性が 62.8%、女性が 35.9%であった。

表 1 出生時の性別

男	62.8%
女	35.9%
無回答	1.3%
合計(n)	1669

(2) 自認する性別

①出生時の性別についての認識

問 24 で自分の性別を出生時の性別と同じだと捉えているかを尋ねたところ、同じと答えた人は 94.8%（1582 人）、別の性別だと捉えている人は 0.3%（7 人）、出生時の性別に違和感がある人は 1.3%（22 人）であった。なおこの設問は複数回答可としたため、自分の性別を出生時の性別と同じと答え、かつ別の性別だと捉えていると答えた者が 2 名いた。

表 2 出生時の性別についての認識

出生時の性別と同じ	94.8%
別の性別だと捉えている	0.3%
違和感がある	1.3%

%は全回答者(n=1669)に占める割合を示す

②今の認識にもっとも近い性別

上記①で別の性別だと捉えていると答えた人及び出生時の性別に違和感があると答えた人に、問 24 の付問において今の認識にもっとも近い性別を尋ねたところ、男 10.3%、女 13.8%、男・女にあてはまらない 79.3%であった。

表 3 （別の性別だと捉えている人および性別に違和感がある人の）
今の認識にもっとも近い性別

男	10.3%
女	13.8%
男・女にあてはまらない	79.3%
合計(n)	29

③シスジェンダーとトランスジェンダー、ノンバイナリージェンダーの割合

問 23 と問 24 をもとに、シスジェンダーとトランスジェンダー、ノンバイナリージェンダーの割合を算出したところ⁴、シスジェンダーは 94.8%、トランスジェンダーは 0.3%、ノンバイナリージェンダーは 1.3%であった。

表 4 出生時の性と性自認の関係

シスジェンダー	94.8%
トランスジェンダー	0.3%
ノンバイナリージェンダー	1.3%
無回答	3.6%
合計(n)	1669

④性自認

問 23 と問 24 をもとに、性自認⁵の割合を算出したところ、男性が 60.6%、女性が 34.3%、ノンバイナリージェンダーが 1.2%であった。

表5 性自認

男	60.6%
女	34.3%
ノンバイナリージェンダー	1.2%
無回答	3.9%
合計(n)	1669

⁴ シスジェンダーとトランスジェンダー、ノンバイナリージェンダーの割合は問 23 と問 24 を用いて以下の方法にもとづき算出した。シスジェンダーは問 23（出生時の戸籍・出生届の性別）で男、もしくは女を選択して問 24（今のご自身の性別認識）で出生時の性別と同じと答えた人、もしくは違和感があると答えたが、問 24 付問の今の認識にもっとも近い性別で問 23 と同じ性別を答えた人とした。つぎに、トランスジェンダーは、問 23 で男、もしくは女を選択し、問 24 で別の性別だと捉えているを選択し、今の認識にもっとも近い性別（問 24 付問）で問 23 の回答と異なる回答をした人と、今の認識にもっとも近い性別（問 24 付問）で違和感があるを選択し、問 23 の回答と異なる性別を選択した人とした。最後にノンバイナリージェンダーは、問 24 の今の認識にもっとも近い性別で違和感があるを選択し、今の認識にもっとも近い性別で男・女にあてはまらないを選択した人と、問 24 で別の性別だと捉えているを選択し、今の認識にもっとも近い性別（問 24 付問）で無回答を選んだ人とした。

⁵ 性自認については調査票で直接尋ねていないため、問 23 と問 24 をもとにして以下の方法で算出した。性自認・男性は、問 23（出生時の戸籍・出生届の性別）で男と回答し、問 24（今のご自身の性別認識）で出生時の性別と同じと回答した人と、問 23 で女と回答し、問 24 で別の性別だととらえている、あるいは違和感があると回答し、その付問で男と回答した人とした。つぎに性自認・女性は、問 23 で女と回答し、問 24 で出生時の性別と同じと回答した人と、問 23 で男と回答し、問 24 で別の性別だと捉えている、あるいは違和感があると回答し、その付問で女と回答した人とした。最後にノンバイナリージェンダーは、問 23 で男もしくは女を選択し、問 24 で別の性別だと捉えている、あるいは違和感があると回答し、その付問で男・女にあてはまらなと回答した人とした。

⑤出生時の性別と性自認のあり方の関係

問 23 で尋ねた出生時の性別と、上記③にて示した性自認のあり方（シスジェンダー／トランスジェンダー／ノンバイナリージェンダー）をクロス集計したところ、出生時の性別・男性のうち、シスジェンダーと答えた割合は 96.3%、トランスジェンダーは 0.1%、ノンバイナリージェンダーは 0.8%であった。

一方、出生時の性別・女性のうち、シスジェンダーは 95.5%、トランスジェンダーは 0.5%、ノンバイナリージェンダーは 2.3%であった。

出生時の性別・女性のほうがトランスジェンダーとノンバイナリージェンダーの割合が高かった。

表6 出生時の性別と性自認のあり方のクロス表

		性自認のあり方				合計(n)
		シスジェンダー	トランスジェンダー	ノンバイナリージェンダー	無回答	
出生時の性別	男	96.3%	0.1%	0.8%	2.9%	1048
	女	95.5%	0.5%	2.3%	1.7%	599
	無回答	4.5%	4.5%	0.0%	90.9%	22

2 恋愛指向と性的指向

(1) 恋愛感情を抱いた相手

問 21 でこれまでに恋愛感情を抱いた相手（恋愛指向）を尋ねたところ、女性のみが最も多く 54.9%、次いで男性のみが 27.3%、誰に対しても恋愛感情を抱いたことがないが 7.9%、ほとんどが男性が 3.4%、ほとんどが女性が 3.2%、男性と女性が同じくらいが 0.8%であった。

表7 これまでに恋愛感情を抱いた相手

誰に対しても恋愛感情を抱いたことがない	7.9%
男性のみ	27.3%
ほとんどが男性	3.4%
男性と女性が同じくらい	0.8%
ほとんどが女性	3.2%
女性のみ	54.9%
上記にあてはまらない	0.9%
無回答	1.6%
合計(n)	1669

(2) 性的に惹かれた相手

問 22 でこれまでに性的に惹かれた相手（性的指向）について尋ねたところ、女性のみが最も多く 54.2%、次いで男性のみが 22.8%、誰に対しても恋愛感情を抱いたことがないが 12.8%、ほ

とんどが女性が 3.4%、ほとんどが男性が 2.4%、男性と女性が同じくらいが 1.6%であった。

表8 これまでに性的に惹かれた相手

誰に対しても性的に惹かれたことがない	12.8%
男性のみ	22.8%
ほとんどが男性	2.4%
男性と女性が同じくらい	1.6%
ほとんどが女性	3.4%
女性のみ	54.2%
上記にあてはまらない	1.1%
無回答	1.7%
合計(n)	1669

(3) 出生時の性別と恋愛感情を抱いた相手

問 21 と問 23 をもとに、出生時の性別と恋愛感情を抱いた相手の性別の関係について検討したところ、出生時の性別が男性のうち、恋愛感情を抱いた相手は女性のみが 87.0%、ほとんどが女性が 4.4%、男性と女性が同じくらいが 0.2%、男性のみが 0.3%、ほとんどが男性が 0.4%、誰に対しても恋愛感情を抱いたことがないが 6.5%であった。男性のみとほとんどが男性の合計は 0.7%であり、これに男性と女性が同じくらいを加えると 0.9%になった。さらに誰に対しても恋愛感情を抱いたことがないを加えると 15.5%に達した。

出生時の性別が女性のうち、恋愛感情を抱いた相手が男性のみが 75.6%、ほとんどが男性が 8.8%、男性と女性が同じくらいが 1.8%、女性のみが 0.3%、ほとんどが女性が 1.2%、誰に対しても恋愛感情を抱いたことがないが 10.5%であった。女性のみとほとんどが女性の合計した割合は 1.5%であり、これに男性と女性が同じくらいを加えると 3.3%であった。さらに誰に対しても恋愛感情を抱いたことがないを加えると 13.8%に達した。

同性のみに恋愛感情を抱く割合では出生時・男性と女性の違いはみられなかったが、ほとんど同性のみに恋愛感情を抱く、恋愛感情を抱いた相手は男性と女性が同じくらい、誰に対しても恋愛感情を抱いたことがないの割合では出生時・女性の割合が高くなっていた。

表9 出生時の性別とこれまでに恋愛感情を抱いた相手のクロス表

		これまでに恋愛感情を抱いた相手								
		誰に対しても恋愛感情を抱いたことがない	男性のみ	ほとんどが男性	男性と女性が同じくらい	ほとんどが女性	女性のみ	左記にあてはまらない	無回答	合計(n)
出生時の性別	男	6.5%	0.3%	0.4%	0.2%	4.4%	87.0%	0.7%	0.6%	1048
	女	10.5%	75.6%	8.8%	1.8%	1.2%	0.3%	1.2%	0.5%	599
	無回答	4.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	9.1%	4.5%	81.8%	22

(4) 出生時の性別と性的に惹かれた相手

問 22 と問 23 を用いて出生時の性別と性的に惹かれた相手の性別の関連性を検討したところ、出生時の性別が男性のうち、性的に惹かれた相手が女性のみが 86.2%、ほとんどが女性が 5.1%、男性と女性が同じくらいが 0.4%、ほとんどが男性が 0.3%、男性のみが 0.8%、誰に対しても性的に惹かれたことがないが 5.9%であった。男性のみ、ほとんどが男性の合計した割合は 1.1%であり、それに男性と女性が同じくらいを加えると 1.5%であった。さらに誰に対しても性的に惹かれたことがないを加えると 7.4%になった。

出生時の性別が女性のうち、性的に惹かれた相手が男性のみが 62.3%、ほとんどが男性が 6.2%、男性と女性が同じくらいが 3.8%、女性のみが 0.2%、ほとんどが女性が 0.5%、誰に対しても性的に惹かれたことがないが 25.0%であった。女性のみ、ほとんどが女性の合計した割合は 0.7%であり、これに男性と女性が同じくらいを加えると 4.5%であった。さらに誰に対しても性的に惹かれたことがないを加えると、29.5%となった。

同性のみに性的に惹かれる割合では出生時、男性の割合が高かったが、ほとんどが同性のみに性的に惹かれる、男性と女性に同じくらい性的に惹かれる、誰に対しても性的に惹かれたことがないの割合では、出生時・女性のほうが高い割合であった。

表 10 出生時の性別とこれまでに性的に惹かれた相手のクロス表

		これまでに性的に惹かれた相手							
出生時の性別		誰に対しても性的に惹かれたことがない	男性のみ	ほとんどが男性	男性と女性が同じくらい	ほとんどが女性	女性のみ	左記にあてはまらない	無回答
									合計(n)
男		5.9%	0.8%	0.3%	0.4%	5.1%	86.2%	0.9%	0.6%
女		25.0%	62.3%	6.2%	3.8%	0.5%	0.2%	1.3%	0.7%
無回答		4.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	4.5%	4.5%	86.4%
									22

(5) 性自認と恋愛感情を抱いた相手

上記 1 (2) ④と問 21 をもとに性自認と恋愛感情を抱いた相手の関係をクロス集計したところ、性自認が男性のうち、恋愛感情を抱いた相手が女性のみが 87.4%、ほとんどが女性が 4.3%、男性と女性が同じくらいが 0.2%、男性のみが 0.3%、ほとんどが男性が 0.4%、誰に対しても恋愛感情を抱いたことがないが 6.6%であった。男性のみと、ほとんどが男性の合計した割合は 0.7%であり、これに男性と女性が同じくらいを加えると 0.9%であった。さらに誰に対しても恋愛感情を抱いたことがないを加えると 7.5%になった。

性自認が女性のうち、恋愛感情を抱いた相手が男性のみが 77.6%、ほとんどが男性が 8.9%、男性と女性が同じくらいが 1.7%、女性のみが 0.0%、ほとんどが女性が 0.9%、誰に対しても恋愛感情を抱いたことがないが 10.0%であった。女性のみと、ほとんどが女性の合計割合は 0.9%であり、これに男性と女性が同じくらいを加えると 2.6%であった。さらに誰に対しても恋愛感情を抱いたことがないを加えると 12.6%であった。

性自認がノンバイナリージェンダーのうち、恋愛感情を抱いた相手が男性のみが 10.0%、ほとんどが男性が 10.0%、男性と女性が同じくらいが 5.0%、女性のみが 15.0%、ほとんどが女性

が 15.0%、誰に対しても恋愛感情を抱いたことがないが 25.0%であった。

性自認・男性と女性を比べると、性自認・男性の方が同性のみに恋愛感情を抱いた割合が高かったが、ほとんどが同性のみ、男性と女性が同じくらい、誰に対しても恋愛感情を抱いたことがないでは性自認・女性の割合が高かった。またノンバイナリージェンダーは、誰に対しても恋愛感情を抱いたことがないの割合が最も高かった。

表 11 性自認とこれまでに恋愛感情を抱いた相手のクロス表

		誰に対しても恋愛感情を抱いたことがない	これまでに恋愛感情を抱いた相手							合計(n)
			男性のみ	ほとんどが男性	男性と女性が同じくらい	ほとんどが女性	女性のみ	左記にあてはまらない	無回答	
性自認	男	6.6%	0.3%	0.4%	0.2%	4.3%	87.4%	0.6%	0.2%	1012
	女	10.0%	77.6%	8.9%	1.7%	0.9%	0.0%	0.5%	0.3%	572
	ノンバイナリー	25.0%	10.0%	10.0%	5.0%	15.0%	15.0%	15.0%	5.0%	20
	無回答	4.6%	10.8%	0.0%	0.0%	1.5%	44.6%	4.6%	33.8%	65

(6) 性自認と性的に惹かれた相手

上記 1 (2) ④と問 22 をもとに性自認と性的に惹かれた相手の関連を検討したところ、性自認が男性のうち、性的に惹かれた相手が女性のみが 86.6%、ほとんどが女性が 5.0%、男性と女性と同じくらいが 0.5%、男性のみが 0.7%、ほとんどが男性が 0.3%、誰に対しても性的に惹かれたことがないが 5.8%であった。男性のみと、ほとんどが男性の合計した割合は 1.0%であり、これに男性と女性と同じくらいを加えると 1.5%であった。さらに誰に対しても性的に惹かれたことがないを加えると 7.3%である。

性自認が女性のうち、性的に惹かれた相手が男性のみが 64.0%、ほとんどが男性が 6.1%、男性と女性と同じくらいが 3.1%、女性のみが 0.0%、ほとんどが女性が 0.3%、誰に対しても性的に惹かれたことがないが 25.0%であった。女性のみと、ほとんどが女性の合計した割合は 0.3%であり、これに男性と女性と同じくらいを加えると 3.4%であった。さらに誰に対しても性的に惹かれたことがないを加えると 28.4%である。

性自認がノンバイナリージェンダーのひとのうち、性的に惹かれた相手が男性のみが 5.0%、ほとんどが男性が 5.0%、男性と女性と同じくらいが 15.0%、女性のみが 15.0%、ほとんどが女性が 10.0%、誰に対しても性的に惹かれたことがないが 40.0%であった。

性自認・男性と女性を比べると、男性の方が同性のみに性的に惹かれた割合が高いが、ほとんどが同性に性的に惹かれた割合は同じであり、男性と女性と同じくらいと誰に対しても性的に惹かれたことがないでは、女性の割合が高かった。またノンバイナリージェンダーは、誰に対しても恋愛感情を抱いたことがないの割合が最も高かった。

表 12 性自認とこれまでに性的に惹かれた相手のクロス表

		誰に対しても性的に惹かれたことがない	これまでに性的に惹かれた相手についてもっとも近いもの							合計(n)
			男性のみ	ほとんどが男性	男性と女性が同じくらい	ほとんどが女性	女性のみ	左記にあてはまらない	無回答	
性自認	男	5.8%	0.7%	0.3%	0.5%	5.0%	86.6%	0.8%	0.3%	1012
	女	25.0%	64.0%	6.1%	3.1%	0.3%	0.0%	0.9%	0.5%	572
	ノンバイナリー	40.0%	5.0%	5.0%	15.0%	10.0%	15.0%	10.0%	0.0%	20
	無回答	4.6%	10.8%	1.5%	1.5%	1.5%	40.0%	4.6%	35.4%	65

3 性的指向のアイデンティティ

(1) 性的指向のアイデンティティ

問 25 で性的指向についてのアイデンティティを尋ねたところ、異性愛者 83.2%、同性愛者 0.4%、両性愛者 2.8%、無性愛者 1.5%、決めたくない・決めていない 6.7%、質問の意味がわからない 3.3%であった。同性愛者と両性愛者、無性愛者の合計は 4.7%であった。

なお、決めたくない・決めていないと回答した人に関しては、別の調査において決めたくない・決めていないと回答した人の22～54%は異性愛者である可能性が指摘されていることから⁶、本稿では決めたくない・決めていないと回答した人を全て性的マイノリティとして捉えることには慎重な立場をとる。

表 13 性的指向のアイデンティティ

異性愛者、すなわちゲイ・レズビアン等ではない	83.2%
ゲイ・レズビアン・同性愛者	0.4%
バイセクシュアル・両性愛者	2.8%
アセクシュアル・無性愛者	1.5%
決めたくない・決めていない	6.7%
質問の意味がわからない	3.3%
無回答	2.2%
合計(n)	1669

(2) 出生時の性別と性的指向のアイデンティティ

問 23 と問 25 をもとに出生時の性別ごとの性的指向のアイデンティティの関係をクロス集計したところ、出生時の性別・男性は、異性愛者 88.1%、同性愛者 0.6%、両性愛者 1.1%、無性愛者 0.7%、決めたくない・決めていない 4.4%、であった。同性愛者と両性愛者、無性愛者の合計は 2.4%であった。

出生時の性別・女性は、異性愛者 77.5%、同性愛者 0.0%、両性愛者 5.8%、無性愛者 3.0%、決めたくない・決めていない 10.7%であった。同性愛者と両性愛者、無性愛者の合計は 8.8%であった。

出生時の性別・女性の方が異性愛者・同性愛者の割合が低く、両性愛者・無性愛者の割合が高かった。

⁶ Hiramori, Daiki, Saori Kamano, and Takeyoshi Iwamoto, 2021, "Are All of the "Undecided" Sexual/Gender Minorities? A Queer Demographic Analysis of Experimental Study to Improve SOGI Questions", アメリカ人口学会大会配付資料, 2021 年 5 月 7 日

表 14 出生時の性別と性的指向のアイデンティティのクロス表 (%)

		性的指向のアイデンティティ						
		異性愛者	同性愛者	両性愛者	無性愛者	決めたくない・決 めていない	質問の意味がわ からない	無回答
出生時の性	男	88.1%	0.6%	1.1%	0.7%	4.4%	3.8%	1.3%
	女	77.5%	0.0%	5.8%	3.0%	10.7%	2.2%	0.8%
	無回答	4.5%	0.0%	0.0%	0.0%	4.5%	9.1%	81.8%
		合計(n)						
		1048						
		599						
		22						

(3) 性自認と性的指向のアイデンティティ

上記 1 (2) ④と問 25 をもとに、性自認と性的指向アイデンティティの項目をクロス集計したところ、性自認・男性は、異性愛者 88.7%、同性愛者 0.5%、両性愛者 1.2%、無性愛者 0.6%、決めたくない・決めていない 4.2%であった。同性愛者と両性愛者、無性愛者の合計は 2.3%であった。

性自認・女性は、異性愛者 79.5%、同性愛者 0.0%、両性愛者 4.9%、無性愛者 2.1%、決めたくない・決めていない 10.5%であった。同性愛者、両性愛者、無性愛者の合計は 7.0%であった。

ノンバイナリージェンダーは、異性愛者 5.0%、同性愛者 0.0%、両性愛者 35.0%、無性愛者 35.0%、決めたくない・決めていない 25.0%であった。

性自認・男性と女性を比べると、女性の方が異性愛者・同性愛者の割合が低く、両性愛者・無性愛者の割合が高かった。またノンバイナリージェンダーは異性愛者の割合が 3 群の中で最も低く、両性愛者と無性愛者、決めたくない・決めていないの割合が最も高かった。

表 15 出生時の性別と性的指向のアイデンティティのクロス表

		性的指向のアイデンティティ						
		異性愛者	同性愛者	両性愛者	無性愛者	決めたくない・決 めていない	質問の意味がわ からない	無回答
性自認	男	88.7%	0.5%	1.2%	0.6%	4.2%	3.8%	1.1%
	女	79.5%	0.0%	4.9%	2.1%	10.5%	2.3%	0.7%
	ノンバイナリー	5.0%	0.0%	35.0%	35.0%	25.0%	0.0%	0.0%
	無回答	52.3%	1.5%	0.0%	0.0%	6.2%	6.2%	33.8%
		合計(n)						
		1012						
		572						
		20						
		65						

4 性的マイノリティと性的マジョリティの割合

(1) 性自認と性的指向におけるアイデンティティ

上記 1 (2) ③で示した性自認のあり方（シスジェンダー／トランスジェンダー／ノンバイナリージェンダー）の区分と、問 25 で尋ねた性的指向のアイデンティティをもとにして、性自認と性的指向におけるアイデンティティの関係を検討した。

シスジェンダーの異性愛者、すなわち性的マジョリティが 81.0%、シスジェンダーの同性愛者・両性愛者（LGB）が 2.6%、シスジェンダーの無性愛者（A）が 1.1%、シスジェンダーの決めたくない・決めていないが 6.1%、（LGBA を含む）トランスジェンダー（T）が 0.3%、（LGBA を含

む) ノンバイナリージェンダーが 1.3%であった。以上から LGBTA とノンバイナリージェンダーの合計割合は 5.3%であった。

表 16 性自認&性的指向のアイデンティティ

シスジェンダーの異性愛者	81.0%
シスジェンダーの同性愛者・両性愛者 (LGB)	2.6%
シスジェンダーの無性愛者 (A)	1.1%
シスジェンダーの「決めたくない・決めていない」	6.1%
トランスジェンダー (LGBA含む)	0.3%
ノンバイナリージェンダー (LGBA含む)	1.3%
無回答	4.5%
質問の意味が分からない	3.1%
合計(n)	1669

(2) 出生時の性別による比較

問 23 で尋ねた出生時の性別と上記 4 (1) の項目をクロス集計したところ、出生時の性別・男性は、シスジェンダーの異性愛者、すなわち性的マジョリティが 88.8%、シスジェンダーの同性愛者・両性愛者 (LGB) が 1.6%、シスジェンダーの無性愛者 (A) が 0.6%、シスジェンダーの決めたくない・決めていないが 4.1%、(LGBA を含む) トランスジェンダー (T) が 0.1%、(LGBA を含む) ノンバイナリージェンダーが 0.8%であった。以上から、出生時・男性における LGBTA とノンバイナリージェンダーの合計割合は 3.1%であった。

出生時の性別・女性は、シスジェンダーの異性愛者、すなわち性的マジョリティが 77.6%、シスジェンダーの同性愛者・両性愛者 (LGB) が 4.8%、シスジェンダーの無性愛者 (A) が 2.0%、シスジェンダーの決めたくない・決めていないが 10.2%、(LGBA を含む) トランスジェンダー (T) が 0.5%、(LGBA を含む) ノンバイナリージェンダーが 2.4%であった。以上から出生時・女性における LGBTA とノンバイナリージェンダーの合計割合は 9.7%であった。

出生時の性別・男性と女性を比較すると、シスジェンダーの異性愛者で男性の割合が高く、シスジェンダーの同性愛者・両性愛者、無性愛者、決めたくない・決めていない、トランスジェンダー、ノンバイナリージェンダーで女性の割合が高かった。

表 17 出生時の性別と性自認&性的指向アイデンティティのクロス表

		性自認&性的指向アイデンティティ							合計(n)
		シスジェンダー の異性愛者	シスジェンダー の同性愛者・両 性愛者 (LGB)	シスジェン ダーの無性愛 者 (A)	シスジェンダーの 「決めたくない・ 決めていない」	トランスジェン ダー (LGBA含 む)	ノンバイナリー ジェンダー (LGBA含む)	無回答	
出生時の性別	男	88.8%	1.6%	0.6%	4.1%	0.1%	0.8%	4.1%	1010
	女	77.6%	4.8%	2.0%	10.2%	0.5%	2.4%	2.4%	586
	無回答	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	4.8%	0.0%	95.2%	21

(3) 性自認による比較

上記 1 (2) ④で示した性自認と 4 (1) で示した性自認のあり方と性的指向におけるアイデンティティの項目をクロス集計したところ、性自認・男性は、シスジェンダーの異性愛者、すなわち性的マジョリティが 92.1%、シスジェンダーの同性愛者・両性愛者 (LGB) が 1.6%、シスジェンダーの無性愛者 (A) が 0.6%、シスジェンダーの決めたくない・決めていないが 4.2%、(LGBA を含む) トランスジェンダー (T) が 0.2%、(LGBA を含む) ノンバイナリージェンダーが 0.1% であった。以上から性自認・男性における LGBTA とノンバイナリージェンダーの合計割合は 2.5% であった。

性自認・女性は、シスジェンダーの異性愛者、すなわち性的マジョリティが 81.4%、シスジェンダーの同性愛者・両性愛者 (LGB) が 5.0%、シスジェンダーの無性愛者 (A) が 2.1%、シスジェンダーの決めたくない・決めていないが 10.7%、(LGBA を含む) トランスジェンダー (T) が 0.0%、(LGBA を含む) ノンバイナリージェンダーが 0.0% であった。以上から性自認・女性における LGBTA とノンバイナリージェンダーの合計の割合は 7.1% であった。

性自認・男性と女性を比較すると、シスジェンダーの異性愛者については男性の割合が高く、シスジェンダーの同性愛者・両性愛者、無性愛者、決めたくない・決めていないの割合は女性の割合が高かった。

表 18 性自認と性自認のあり方&性的指向のアイデンティティのクロス表

		性自認のあり方&性的指向のアイデンティティ							合計(n)
		シスジェンダー の異性愛者	シスジェンダー の同性愛者・両 性愛者 (LGB)	シスジェン ダーの無性愛 者 (A)	シスジェンダーの 「決めたくない・ 決めていない」	トランスジェン ダー (LGBA 含 む)	ノンバイナリー ジェンダー (LGBA 含む)	無回答	
性自認	男	92.1%	1.6%	0.6%	4.2%	0.2%	0.1%	1.1%	974
	女	81.4%	5.0%	2.1%	10.7%	0.0%	0.0%	0.7%	559
	ノンバイナリー	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	20
	無回答	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	4.7%	1.6%	93.8%	64

5 不快な冗談やからかい、暴力の経験～性的マジョリティ・マイノリティの比較～

ここからは、問 2 における小学校から高校の間に友人や同級生による、(1) 不快な冗談やからかい、(2) 身体的暴力、(3) 「ホモ」「おかま」「レズ」「おとこおんな」「オネエ」といったことにかかわる不快な冗談やからかい、(4) 「ホモ」「おかま」「レズ」「おとこおんな」「オネエ」といったことでふるわれる身体的な暴力を受けた経験割合についてシスジェンダーの異性愛者、同性愛者と両性愛者 (以下 LGB と表示)、無性愛者 (以下 A と表記)、決めたくない・決めていない、そしてトランスジェンダーおよびノンバイナリー (以下 TGNB と表記) の 5 群間で比較をおこなった。

(1) 不快な冗談やからかい

①全体 (単純集計)

不快な冗談やからかいを経験した割合は全体で 39.5% であった。

表１９ 不快な冗談、からかいを受けたことがある

ある	39.5%
ない	57.3%
無回答	3.2%
合計(n)	1669

②性的マジョリティと性的マイノリティの比較

不快な冗談やからかいを経験したことがある割合は、シスジェンダーの異性愛者は 39.5%、LGB は 54.8%、A は 41.2%、決めたくない・決めていないは 48.5%、TGNB は 77.8% であった。シスジェンダーの異性愛者と A はほぼ同じ割合であったが、LGB は 1.4 倍、決めたくない・決めていないは 1.2 倍、TGNB は 2.0 倍、不快な冗談やからかいを経験した割合が高かった。

表２０ 性的マジョリティ・マイノリティと不快な冗談やからかいを経験した割合のクロス表

	不快な冗談、からかいを自分が受けたことがある		合計(n)
	あり	なし	
シスジェンダーの異性愛者	39.5%	60.5%	1309
LGB	54.8%	45.2%	42
A	41.2%	58.8%	17
決めたくない・決めていない	48.5%	51.5%	99
TGNB	77.8%	22.2%	27

(2) 身体的暴力

①全体（単純集計）

身体的暴力を経験した割合は全体で 12.6%であった。

表２１ 身体的暴力を経験した割合

ある	12.6%
ない	84.4%
無回答	3.0%
合計(n)	1669

②性的マジョリティと性的マイノリティの比較

身体的暴力を経験した割合は、シスジェンダーの異性愛者は 11.4%、LGB は 16.7%、A は 23.5%、決めたくない・決めていないは 22.2%、TGNB は 29.6% であった。シスジェンダーの異性愛者と比べて、LGB は 1.5 倍、A は 2.1 倍、決めたくない・決めていないは 1.9 倍、TGNB

は 2.6 倍、身体的暴力を受けたことのある割合が高かった。

表 2 2 性的マジョリティ・マイノリティと身体的暴力を経験した割合のクロス表

	身体的暴力を自分が受けたことがある		合計(n)
	あり	なし	
シスジェンダーの異性愛者	11.4%	88.6%	1311
LGB	16.7%	83.3%	42
A	23.5%	76.5%	17
決めたくない・決めていない	22.2%	77.8%	99
TGNB	29.6%	70.4%	27

(3)「ホモ」「おかま」「レズ」「おとこおんな」「オネエ」といったことにかかわる不快な冗談やからかい

①全体（単純集計）

性的マイノリティにかかわる不快な冗談、からかいを経験した割合は全体で 7.7%であった。

表 2 3 性的マイノリティにかかわる、不快な冗談やからかいを経験した割合

ある	7.7%
ない	88.9%
無回答	3.4%
合計(n)	1669

②性的マジョリティと性的マイノリティの比較

性的マイノリティにかかわる不快な冗談やからかいを経験した割合は、シスジェンダーの異性愛者は 7.3%、LGB は 11.9%、A は 11.8%、決めたくない・決めていないは 10.1%、TGNB は 25.9%であった。シスジェンダーの異性愛者と比べて、LGB と A は 1.6 倍、決めたくない・決めていないは 1.4 倍、TGNB は 3.5 倍高かった。

表24 性的マジョリティ・マイノリティと性的マイノリティにかかわる、不快な冗談やからかいを経験した割合のクロス表

	性的マイノリティにかかわる、不快な冗談、からかいを自分が受けたことがある		合計(n)
	あり	なし	
シスジェンダーの異性愛者	7.3%	92.7%	1305
LGB	11.9%	88.1%	42
A	11.8%	88.2%	17
決めたくない・決めていない	10.1%	89.9%	99
TGNB	25.9%	74.1%	27

(4)「ホモ」「おかま」「レズ」「おとこおんな」「オネエ」といったことでふるわれる身体的暴力

①全体（単純集計）

性的マイノリティにかかわる身体的な暴力を経験した割合は全体で 1.6%であった。

表25 性的マイノリティにかかわる身体的暴力を経験した割合

ある	1.6%
ない	95.1%
無回答	3.2%
合計(n)	1669

②性的マジョリティと性的マイノリティの比較

性的マイノリティにかかわる身体的暴力を受けたことがある割合は、シスジェンダーで異性愛者は 1.5%、LGB と A は 0.0%、決めたくない・決めていないは 2.0%、TGNB は 7.4%であった。シスジェンダーの異性愛者と比べて TGNB は経験したことの割合が 4.9 倍高かった。

表26 性的マジョリティ・マイノリティと性的マイノリティにかかわる身体的暴力を経験した割合のクロス表 (%)

	性的マイノリティにかかわることとふるわれる身体的暴力を自分が受けたことがある		合計(n)
	あり	なし	
シスジェンダーの異性愛者	1.5%	98.5%	1306
LGB	0.0%	100.0%	42
A	0.0%	100.0%	17
決めたくない・決めていない	2.0%	98.0%	99
TGNB	7.4%	92.6%	27

6 自殺念慮と自殺未遂

問3では、小学校から大学入学後までの間に（1）死ねたらと思った、または自死の可能性を考えた（以下、自殺念慮と表記）、（2）自死を図った（以下、自殺未遂と表記）経験を、①小・中学校（6～15歳頃）、②高校（16～18歳頃）、③大学入学後、の3つの時期に分けて尋ねた。このうち、①～③の時期を統合し小学校から大学入学後までに自殺念慮の有無と自殺未遂の経験の有無を示す変数を作成した上で、シスジェンダーの異性愛者、同性愛者・両性愛者（LGB）、無性愛者（A）、決めたくない・決めていない、そしてトランスジェンダーおよびノンバイナリー（TGNB）の5群間で比較を行った。

（1）自殺念慮

①全体（単純集計）

小学校から大学入学後までの間で自殺念慮を経験した割合は25.6%であった。

表27 自殺念慮を経験した割合

ある	25.6%
ない	73.2%
無回答および無効回答	1.1%
合計(n)	1669

②性的マジョリティと性的マイノリティの比較

小学校から大学入学後までの間で自殺念慮を経験した割合は、シスジェンダーの異性愛者22.3%、LGBは56.8%、Aは27.8%、決めたくない・決めていないは43.0%、TGNBは81.5%であった。シスジェンダーの異性愛者と比べて、LGBは2.5倍、Aは1.2倍、決めたくない・決めていないは1.9倍、TGNBは3.7倍、経験した割合が高かった。

表28 性的マジョリティ・マイノリティと自殺念慮を経験した割合のクロス表

	自殺念慮		合計(n)
	ある	ない	
シスジェンダーの異性愛者	22.3%	77.7%	1337
LGB	56.8%	43.2%	44
A	27.8%	72.2%	18
決めたくない・決めていない	43.0%	57.0%	100
TGNB	81.5%	18.5%	27

（2）自殺未遂

①単純集計

小学校から大学入学後までの間で自殺未遂を経験した割合は4.0%であった。

表29 自死未遂を経験した割合

ある	4.0%
ない	94.9%
無回答および無効回答	1.1%
合計(n)	1669

②性的マジョリティと性的マイノリティの比較

小学校から大学入学後までの間で自殺未遂を経験した割合は、シスジェンダーの異性愛者は2.8%、LGBは15.9%、Aは5.6%、決めたくない・決めていないは7.0%、TGNBは25.9%であった。シスジェンダーの異性愛者と比べて、LGBは5.7倍、Aは2.0倍、決めたくない・決めていないは2.5倍、そしてTGNBは9.3倍、経験した割合が高かった。

表30 性的マジョリティ・マイノリティと自殺未遂を経験した割合のクロス表

	自殺未遂		合計(n)
	ある	ない	
シスジェンダーの異性愛者	2.8%	97.2%	1338
LGB	15.9%	84.1%	44
A	5.6%	94.4%	18
決めたくない・決めていない	7.0%	93.0%	100
TGNB	25.9%	74.1%	27

7 まとめと考察

A. 性的マジョリティと性的マイノリティの割合

(1) 出生時の性別と性自認の関係

まず全体におけるシスジェンダー、トランスジェンダー、そしてノンバイナリージェンダーの割合を見ていくと、シスジェンダー94.8%、トランスジェンダー0.3%、ノンバイナリージェンダー1.3%であった。トランスジェンダーとノンバイナリージェンダーを合計すると1.6%であり、近畿大学生の約63人に1人が出生時に割り当てられた性別に違和感を持っていることが明らかになった。

つぎに出生時の性別ごとの性自認のあり方についての割合を見ていくと、男性ではシスジェンダー96.3%、トランスジェンダー0.1%、ノンバイナリージェンダー0.8%であった。一方女性では、各々95.5%、0.5%、2.3%であった。トランスジェンダーとノンバイナリージェンダーを合計した割合では、男性0.9%、女性2.8%であり、男性では約111人に1人が、女性では約36人に1人が出生時に割り当てられた性別に違和感を持っていることが明らかになった。女性の方が性別への違和感を持つ割合が高かった。

(2) 恋愛指向と性的指向について

①恋愛指向について

まず全体における恋愛感情の向かう性別（恋愛指向）について確認する。「男性と女性が同じく

らい」と答えた割合は 0.8%（約 125 人に 1 人）、誰に対しても恋愛感情を抱いたことがない割合は 7.9%（約 13 人に 1 人）であり、両者の合計は 8.7%（約 11 人に 1 人）であった。

つぎに性自認別の恋愛指向の割合について確認する。まず男性では、女性のみ 87.4%、ほとんどが女性 4.3%、男性と女性が同じくらい 0.2%、ほとんどが男性 0.4%、男性のみ 0.3%、誰に対しても恋愛感情を抱いたことがない 6.6%、これらにあてはまらない 0.6%であった。恋愛対象が女性のみと答えた完全な異性愛指向の人は 9 割を切っていた。また恋愛指向におけるマイノリティの指向を持つ割合、すなわち男性と女性が同じくらい、ほとんどが男性、男性のみ、誰に対しても恋愛感情を抱いたことがないの合計は 7.5%（約 13 人に 1 人）であった。

一方女性では男性のみ 77.6%、ほとんどが男性 8.9%、男性と女性が同じくらい 1.7%、ほとんどが女性 0.9%、女性のみ 0.0%、誰に対しても恋愛感情を抱いたことがない 10.0%、これらにあてはまらない 0.5%であった。恋愛対象が男性のみと答えた完全な異性愛指向の人は 8 割を切っていた。また恋愛指向におけるマイノリティの指向を持つ割合、すなわち男性と女性が同じくらい、ほとんどが女性、女性のみ、誰に対しても恋愛感情を抱いたことがないの合計は 12.6%（約 8 人に 1 人）であった。

ノンバイナリージェンダーでは、男性のみ 10.0%、ほとんどが男性 10.0%、男性と女性が同じくらい 5.0%、ほとんどが女性 15.0%、女性のみ 15.0%、誰に対しても恋愛感情を抱いたことがない 25.0%、これらにあてはまらない 15.0%であった。

性自認における男性と女性を比較すると、誰にしても恋愛感情を抱いたことがない、男性と女性と同じくらい、ほとんど同性では、女性の割合が高かったが、同性のみと答えた割合では男性の割合が高かった。

②性的指向について

まず全体における性的に惹かれた相手の性別（性的指向）について確認する。「男性と女性と同じくらい」と答えた割合は 1.6%（約 63 人に 1 人）、誰に対しても性的に惹かれたことがない割合は 12.8%（約 8 人に 1 人）であり、両者の合計は 13.4%（約 7 人に 1 人）であった。

つぎに性自認別の性的指向の割合について確認する。まず男性では、女性のみ 86.6%、ほとんどが女性 5.0%、男性と女性が同じくらい 0.5%、ほとんどが男性 0.3%、男性のみ 0.7%、誰に対しても性的に惹かれたことがない 5.8%、これらにあてはまらない 0.8%であった。性的に惹かれる相手が女性のみと答えた完全な異性愛指向の人は 9 割を切っていた。また性的指向におけるマイノリティの指向を持つ割合、すなわち男性と女性が同じくらい、ほとんど男性、男性のみ、誰に対しても性的に惹かれたことがない、の合計は 7.3%（約 14 人に 1 人）であった。

一方女性では男性のみ 64.0%、ほとんどが男性 6.1%、男性と女性が同じくらい 3.1%、ほとんどが女性 0.3%、女性のみ 0.0%、誰に対しても性的に惹かれたことがない 25.0%、これらにあてはまらない 0.9%であった。性的に惹かれた相手が男性のみと答えた完全な異性愛指向の人は 7 割を切っていた。また性的指向におけるマイノリティの指向を持つ割合、すなわち男性と女性が同じくらい、ほとんどが女性、女性のみ、誰に対しても性的に惹かれたことがないの合計は 28.4%（約 4 人に 1 人）であった。

ノンバイナリージェンダーでは、男性のみ 5.0%、ほとんどが男性 5.0%、男性と女性が同じくらい 15.0%、ほとんどが女性 10.0%、女性のみ 15.0%、誰に対しても性的に惹かれたことがない 40.0%、これらにあてはまらない 10.0%であった。

性自認における男性と女性を比較すると、誰に対しても性的に惹かれたことがない、男性と女性と同じくらいでは、女性の割合が高かったが、ほとんどが同性、同性のみと答えた割合では男性の割合が高かった。

③性的指向のアイデンティティ

性的指向のアイデンティティについて尋ねたところ、全体では異性愛者 83.2%、同性愛者 0.4%、両性愛者 2.8%、無性愛者 1.5%、決めたくない・決めていない 6.7%であった。異性愛者のアイデンティティを持つ人は 8 割 5 分を切っていた。また性的指向におけるマイノリティのアイデンティティを持つ割合、すなわち同性愛者、両性愛者、無性愛者の合計は 4.7%（約 21 人に 1 人）であった。

つぎに性自認ごとに性的指向のアイデンティティの割合を見ていく。性自認・男性では、異性愛者 88.7%、同性愛者 0.5%、両性愛者 1.2%、無性愛者 0.6%、決めたくない・決めていない 4.2%であった。異性愛者のアイデンティティを持つ人は 9 割を切っていた。また同性愛者、両性愛者、無性愛者の合計は 2.3%（約 43 人に 1 人）であった。

性自認が女性では、異性愛者 79.5%、同性愛者 0.0%、両性愛者 4.9%、無性愛者 2.1%、決めたくない・決めていない 10.5%であった。異性愛者のアイデンティティを持つ人は 9 割を切っていた。また同性愛者、両性愛者、無性愛者の合計は 2.3%（約 43 人に 1 人）であった。

ノンバイナリージェンダーでは、異性愛者 5.0%、同性愛者 0.0%、両性愛者 35.0%、無性愛者 35.0%、決めたくない・決めていない 25.0%であった。

性自認における男性と女性を比較すると、異性愛者と同性愛者では男性の割合が高かったが、両性愛者、無性愛者、決めたくない・決めていないでは女性の割合が高かった。

(3) 性的マジョリティと性的マイノリティの割合

全体の割合では、シスジェンダーかつ異性愛者 81.0%、シスジェンダーかつ同性愛者または両性愛者 2.6%、シスジェンダーの無性愛者 1.1%、（同性愛者・両性愛者・無性愛者を含む）トランスジェンダー 0.3%、（同性愛者・両性愛者・無性愛者を含む）ノンバイナリージェンダー 1.3%、決めたくない・決めていない 6.1%であった。

以上から、性的マジョリティ、すなわち、シスジェンダーかつ異性愛者の割合は約 8 割であった一方で、性的マイノリティのうちシスジェンダーの同性愛者・両性愛者、シスジェンダーの無性愛者、（同性愛者・両性愛者・無性愛者を含む）トランスジェンダー、（同性愛者・両性愛者・無性愛者を含む）ノンバイナリージェンダーの合計は 5.3%（約 19 人に 1 人）であった。

つぎに性自認ごとの性的マジョリティとマイノリティの割合を見ていく。性自認・男性では、シスジェンダーかつ異性愛者 92.1%、シスジェンダーかつ同性愛者または両性愛者 1.6%、シスジェンダーの無性愛者 0.6%、（同性愛者・両性愛者・無性愛者を含む）トランスジェンダー 0.2%、（同性愛者・両性愛者・無性愛者を含む）ノンバイナリージェンダー 0.1%、決めたくない・決めていない 4.2%であった。以上から、性的マジョリティ、すなわち、シスジェンダーかつ異性愛者の割合は約 9 割であった一方で、性的マイノリティ、すなわちシスジェンダーの同性愛者・両性愛者、シスジェンダーの無性愛者、（同性愛者・両性愛者・無性愛者を含む）トランスジェンダー、（同性愛者・両性愛者・無性愛者を含む）ノンバイナリージェンダーの合計は 2.4%（約 42 人に 1 人）であった。

性自認・女性では、シスジェンダーかつ異性愛者 81.4%、シスジェンダーかつ同性愛者または両性愛者 5.0%、シスジェンダーの無性愛者 2.1%、(同性愛者・両性愛者・無性愛者を含む)トランスジェンダー 0.0%、(同性愛者・両性愛者・無性愛者を含む)ノンバイナリージェンダー 0.0%、決めたくない・決めていない 10.7%であった。以上から、性的マジョリティ、すなわち、シスジェンダーかつ異性愛者の割合は約 8 割であった一方で、性的マイノリティ、すなわちシスジェンダーの同性愛者・両性愛者、シスジェンダーの無性愛者、(同性愛者・両性愛者・無性愛者を含む)トランスジェンダー、(同性愛者・両性愛者・無性愛者を含む)ノンバイナリージェンダーの合計は 7.1% (約 14 人 1 人) であった。

性自認における男性と女性を比較すると、異性愛者、トランスジェンダー、そしてノンバイナリージェンダーでは男性の割合が高かったが、同性愛者・両性愛者、無性愛者、決めたくない・決めていない、では女性の割合が高かった。

(4) 大阪市調査および全国調査との比較

ここからは本調査におけるトランスジェンダーおよびノンバイナリージェンダーの割合、性的指向アイデンティティの割合、そして LGBTA の割合に関して、本稿の冒頭で紹介した大阪市調査および全国調査との比較をおこなう。

①トランスジェンダーの割合

まず本調査におけるトランスジェンダーおよびノンバイナリージェンダーの定義と、大阪市調査及び全国調査の比較をおこなう。トランスジェンダーを、大阪市調査では現在自認する性別が出生時とは別の性別または「その他」の人と定義し⁷、全国調査では現在認識する性別が出生時性別とは別の性別だと捉えている、または違和感がある人と定義している⁸。これらは、本調査におけるトランスジェンダー及びノンバイナリージェンダーの定義に重なっており、両調査と本調査を比較することは可能である。

そのうえで 3 者を比較すると、まず全体におけるトランスジェンダーの割合は本調査では 1.6% であったのに対し、大阪市調査では 0.7%、全国調査では 0.6% であり、本調査の割合は 2 倍以上高かった。つぎに出生時の性別が男性の場合におけるトランスジェンダーの割合は本調査 0.9%、大阪市調査 0.3%、全国調査 0.6% であり、出生時の性別が女性の場合は本調査 2.8%、大阪市調査 0.5%、全国調査 0.6% であった。男性と女性のいずれにおいても本調査の割合が高く、とりわけ女性における割合はおおよそ 5 倍高かった。差異が生まれた要因については、さらなる検討が必要だが、大阪市調査、全国調査は対象年齢をそれぞれ 18 ～ 59 歳、18 ～ 69 歳としている一方で、本調査では大学生を対象としていることから、年齢が影響を及ぼしている可能性を指摘しておく。

②性的指向アイデンティティの割合

つぎに本調査と大阪市調査、全国調査の結果を比較する (表 31 参照)。これらの結果を比較す

⁷ <https://www.ipss.go.jp/projects/j/SOGI/%E7%B5%90%E6%9E%9C%E9%80%9F%E5%A0%B120190425%E5%85%AC%E8%A1%A8%E7%94%A8.pdf>

(最終確認 2024 年 1 月 5 日)

⁸ <https://www.ipss.go.jp/projects/j/SOGI2/ZenkokuSOGISummary20231027.pdf>

(最終確認 2024 年 1 月 5 日)

ると、異性愛者、同性愛者、決めたくない・決めていないでは大きな差は見られなかった一方で、両性愛者と無性愛者に関しては本調査の割合が高かった。差異が生まれた要因については、さらなる検討が必要だが、大阪市調査、全国調査と本調査では対象年齢が異なっていることから、そのことが影響を及ぼしている可能性がある。

表 31 性的指向アイデンティティの比較

	近畿大学調査	大阪市調査	全国調査
異性愛者	83.2%	83.2%	79.0%
同性愛者	0.4%	0.7%	0.4%
両性愛者	2.8%	1.4%	1.8%
無性愛者	1.5%	0.8%	0.9%
決めたくない・決めていない	6.7%	5.2%	5.6%

③ LGBT(A) の割合

ここで本調査と大阪市調査、全国調査における LGBT(A) の割合を比較する。大阪市調査では LGBT2.7%、さらに無性愛者を加えると 3.3%であり、全国調査では LGBT2.6%、さらに無性愛者を加えると 3.5%であったが、本調査では LGBT2.9%⁹、さらに無性愛者を加えると 4.0%であった。

これらの結果を比較すると、LGBT およびそこに無性愛者を加えた割合に大きな差は見られなかった。

B. 不快な冗談やからかい、暴力の経験

(1) 本調査のまとめ

不快な冗談やからかいを受けた経験に関して、シスジェンダーの異性愛者（性的マジョリティ）と同性愛者・両性愛者（LGB）、無性愛者（A）、決めたくない・決めていない、そしてトランスジェンダー・ノンバイナリージェンダー（TGNB）を比較したところ、不快な冗談・からかいを自分が受けた経験では A においてはシスジェンダーかつ異性愛者との間にほとんど差が見られなかったが、LGB では 1.4 倍、TGNB では 2.0 倍高かった。身体的な暴力を受けた経験では、シスジェンダーの異性愛者（性的マジョリティ）と比べて、LGB は 1.5 倍、A は 2.1 倍、決めたくない・決めていないは 1.9 倍、TGNB は 2.6 倍、高かった。

つぎに性的マイノリティの侮蔑表現にかかわる不快や冗談、からかいを自分が受けたことのある割合はシスジェンダーの異性愛者に比べると LGB と A が 1.6 倍、決めたくない・決めていないが 1.4 倍、TGNB が 3.5 倍高かった。性的マイノリティにかかわる身体的な暴力を自分が受けたこ

⁹ この割合は、大阪市調査、全国調査におけるトランスジェンダーの定義にあわせて、ノンバイナリジェンダーの割合をトランスジェンダーの割合に含めている。

とのある LGB と A はいなかったが、決めたくない・決めていないはシスジェンダーの異性愛者とほぼ同じ割合であり、TGNB は 5.3 倍高かった。

(2) 全国調査との比較

本調査では全国調査と不快な冗談やからかい、身体的な暴力に関して同様の質問項目を用いており、調査結果を比較することが可能である。まず不快な冗談やからかいと身体的な暴力を経験した結果について、近畿大学調査と全国調査を比較する（表 32）。両調査とも、シスジェンダー、異性愛者またはシスジェンダーの異性愛者と比べて LGB、A、決めたくない・決めていない、トランスジェンダーのほうが不快な冗談やからかい、身体的暴力を経験した割合が高かった。

また両調査を比較すると、全国調査の方が不快な冗談やからかいと身体的暴力の両方において、LGB、A、決めたくない・決めていない、そしてトランスジェンダーの経験した割合が高かった。

表 32 不快な冗談やからかいと、身体的暴力の比較

		近畿大学調査	全国調査
不快な冗談 やからかい	シスジェンダーの異性愛者	39.5%	
	シスジェンダー		58.0%
	異性愛者		58.4%
	LGB	54.8%	81.6%
	A	41.2%	75.5%
	決めたくない・決めていない	48.5%	68.2%
	トランスジェンダー	77.8%	84.4%
身体的暴力	シスジェンダーの異性愛者	11.4%	
	シスジェンダー		19.7%
	異性愛者		19.1%
	LGB	16.7%	28.1%
	A	23.5%	34.7%
	決めたくない・決めていない	22.2%	29.4%
	トランスジェンダー	29.6%	43.8%

つぎに性的マイノリティにかかわる不快な冗談やからかいと身体的な暴力を経験した割合について、近畿大学調査と全国調査の結果を比較する（表 33）。いずれの調査においても、シスジェンダー、異性愛者またはシスジェンダーの異性愛者と比べてLGB、A、決めたくない・決めていない、トランスジェンダーのほうが不快な冗談やからかい、身体的暴力を経験する割合が高かった。

また両調査を比較すると、性的マイノリティにかかわる不快な冗談やからかいではAに関しては近畿大学調査の方が高い割合であったが、LGBでは2.1倍、決めたくない・決めていないとトランスジェンダーでは1.3倍、全国調査のほうが高い割合であった。また、性的マイノリティにかかわる身体的暴力では、決めたくない・決めていないでは両調査はほぼ同じ割合であったが、LGB、A、トランスジェンダーでは全国調査の割合が高かった。

概ね全国調査のほうが高い割合であった理由として、さらなる検討が必要であるが、近畿大学調査と全国調査の調査対象年齢の違い、およびいじめやからかい、身体的暴力に対する社会的許容度が近年減少してきており、それが年齢層の低い近畿大学調査の結果に影響を及ぼしている可能性が考えられる。

表 33 性的マイノリティにかかわる不快な冗談やからかいと、身体的暴力の比較

		近畿大学調査	全国調査
性的マイノリティにかかわる不快な冗談やからかい	シスジェンダーの異性愛者	7.3%	
	シスジェンダー		6.7%
	異性愛者		6.4%
	LGB	11.9%	25.4%
	A	11.8%	8.2%
	決めたくない・決めていない	10.1%	13.0%
	トランスジェンダー	25.9%	34.4%
性的マイノリティにかかわる身体的暴力	シスジェンダーの異性愛者	1.5%	
	シスジェンダー		1.4%
	異性愛者		1.2%
	LGB	0.0%	5.3%
	A	0.0%	6.1%
	決めたくない・決めていない	2.0%	2.3%
	トランスジェンダー	7.4%	9.4%

C. 自殺念慮と自殺未遂の経験

(1) 本調査のまとめ

自殺念慮の経験に関して、シスジェンダーの異性愛者（性的マジョリティ）と同性愛者・両性愛者（LGB）、無性愛者（A）、決めたくない・決めていない、そしてトランスジェンダー・ノンバイナリージェンダー（TGNB）を比較したところ、自殺念慮を経験した割合ではLGBは2.5倍、Aは1.2倍、決めたくない・決めていないは1.9倍、TGNBは3.7倍、経験した割合が高かった。

つぎに、自殺未遂を経験した割合では、LGBは5.7倍、Aは2.0倍、決めたくない・決めていないは2.5倍、そしてTGNBは9.3倍、経験した割合が高かった。

(2) 大阪市調査との比較

本調査では大阪市調査と自殺念慮および自殺未遂に関して同様の質問項目を用いており、調査結果を比較することが可能である。まず自殺念慮と自殺未遂を経験した割合に関する、近畿大学調査と大阪市調査の結果を比較する¹⁰(表34)。両調査とも、シスジェンダーの異性愛者と比べてLGB、トランスジェンダーのほうが自殺念慮および自殺未遂を経験する割合が高かった。

また自殺念慮および自殺未遂に関して、両調査を比較すると、近畿大学調査のほうがシスジェンダーの異性愛者、LGB、そしてトランスジェンダーの経験割合が高かった。

概ね近畿大学調査の方が高い割合であった理由に関しては今後の検討課題としたい。

表 34 自殺念慮・未遂に関する性的マジョリティと性的マイノリティの比較

		近畿大学調査	大阪市調査
自殺念慮	シスジェンダーの異性愛者	23.3%	19.4%
	LGB	56.8%	39.8%
	トランスジェンダー	81.5%	43.8%
自殺未遂	シスジェンダーの異性愛者	2.8%	1.5%
	LGB	15.9%	9.7%
	トランスジェンダー	25.9%	15.6%

¹⁰ <https://osaka-chosa.jp/health.html>（最終確認 2024 年 1 月 5 日）

終わりに

最後に、性の多様性に関して大学における施策を展開するにあたって本稿の調査結果から示唆される点を 3 点述べたい。

まず、本調査をつうじて近畿大学生のなかに一定割合の性的マイノリティの学生がいることを前提とする必要性があらためて確認されたと言えるだろう。実際に、本調査では 5.3%の学生が LGBTA であると回答した。この数値は、教員にとっては授業で、事務職員にとっては業務で接する学生の中に性的マイノリティの学生が存在しているという認識をもつことの必要性を示している。そして今回の調査は学生を対象として実施されたが、その対象とされなかった近畿大学の教職員の中に性的マイノリティが存在することを前提に大学の慣習や福利厚生を含めた諸制度についても点検することが求められていると言えよう。

つぎに本調査では性的マイノリティのなかの多様性が示された。例を挙げれば、約 1 割の学生が「誰に対しても恋愛感情を抱いたことがない」「誰に対しても性的に惹かれたことがない」と回答した。また出生時の性別に対して「別の性別だと捉えている」「違和感がある」と答えた者の 8 割が、今の認識にもっとも近い性別として「男・女にあてはまらない」と答えたことは、出生時の性別に違和感がある＝生時の性別とは反対の性自認を持っているとは言えないことを示している。さらには、「恋愛感情を抱く」とことと、「性的に惹かれること」は完全に重なり合わなかった。このことは、恋愛感情と性的感情を独立して捉える必要性を示している。以上の結果は、対応や接し方において、LGBTA 以外の性的マイノリティの存在を念頭に置いた施策の実施を求めているといえるだろう。

最後に、性的マイノリティの学生は不快な冗談やからかい、そして身体的な暴力の対象となりやすく、自殺念慮や自殺未遂などのメンタルヘルス上のリスクを抱えやすいことから、大学における安全な環境の整備が喫緊の課題であることが示された。また大阪市調査や全国調査を含めた多くの調査でも明らかにされてきたが、近畿大学生を対象とした調査においても、性的マイノリティが暴力にさらされやすく、メンタルヘルスを悪化させやすい状況にあるとの結果が確認された意義は大きい。大学において性的マイノリティの健康リスクを低減させるために、大学としてすべての学生・教職員の修学・就労・教育研究にかかわる環境を保障するとの理念を示すとともに、その理念に基づく施策が求められている。具体的には、大学の構成員に対する啓発や教育に取り組むとともに、性的マイノリティの学生や教職員が悩みや困難を抱えたときに相談しやすい体制の整備・充実を図っていくことが要請されているといえるだろう。